

所属・資格 ドイツ文学科・准教授

申請者氏名 関口 なほ子

|   |  |  |
|---|--|--|
| 研究課題  |  | ドイツ・ユダヤ人女性作家・作品研究 — ワイマール時代以降の「書く女たち」  |
| 報告の概要   | 研究目的<br>および<br>研究概要  | ドイツ語を母語とするユダヤ人の文学作品研究、おもに 20 世紀のドイツ・ユダヤ人女性作家・作品、とくにナチによって迫害された経験をもつ作家（グレーテ・ヴァイルとルート・クリューガー等）の作品を取り上げ、その問題設定を明確にし、〈書く〉という行為を通じて、ドイツ・ユダヤ人女性作家としての自己同一性の問題を共時的に捉えることを目的とする。   |
|   | 研究<br>の<br>結果  | グレーテ・ヴァイルにおいては、強制収容所で家族を殺された作家自身による体験を「私-語り手」が文学的に再構成する手法が検討された。作品の問題設定には、①戦争犯罪の〈犠牲者〉、〈加害者〉、歴史的・政治的に位置づけ困難な〈加担者〉に対する作家の認識、②1968 年代以降の西ドイツのテロリズムを媒介した戦争犯罪の自己検証、③〈権力／暴力／法〉をめぐる構造的な矛盾から追及される〈抵抗〉の問題が指摘された。これらの問題を整理しつつグレーテ・ヴァイルの〈証言〉文学のありようを下記研究論文にまとめた。<br>ルート・クリューガーのホロコースト体験を題材にした自伝においては、①近代ならびに戦後文学における反ユダヤ主義・ユダヤ人問題、②戦争体験と記憶の文学的加工、③自伝作品においてホロコースト体験を〈語る〉ことの意味について考察を進めている。 |
|   | 研究<br>の<br>考<br>察<br>・<br>反<br>省   | クリューガーの二次文献収集を継続し、それらの精査を行う。クリューガーの自伝の特徴を明確にすべく、他の作家の自伝作品、一例を挙げればコルデリア・エドヴァルドソンやドイツ人作家によるアウシュヴィッツ体験に基づく作品との比較も視野に入れて考察し、研究論文にまとめることが課題として残されている。   |
| 研究発表<br>学会名<br>発表テーマ<br>年月日／場所<br><br>研究成果物<br>テーマ<br>誌名<br>巻・号<br>発行年月日<br>発行所・者 | <p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>研究論文<br/>テーマ：「戦争の記憶と証言—グレーテ・ヴァイルの自伝的小説『私の姉アンティゴネ』—」<br/>誌名：研究紀要， 第 98 号, 35-61 頁<br/>2019 年 9 月 30 日発行<br/>日本大学人文科学研究所</p> |  |